

出張報告

報告日 2026年7月13日

会 派 名	社会クラブ・柏崎のみらい連合
報告者氏名	星野幸彦・池野里美
種 別	☐ 調査研究（ ☐ 行政視察） ☒ 研修会 ☐ 要請・陳情 ☐ 各種会議
用 務	福島原発震災情報連絡センタースタディツアー参加
日 時	R8/4/23(木) 13:00 ~ R8/4/24(金)13:00
場 所 (会場)	・研修会場：いわき湯本温泉古滝屋（福島県いわき市常磐湯本町三函 208） ・スタディツアー（福島県大熊町内）
調査項目等	・福島原発震災情報連絡センター第16回総会&被災地スタディツアーへの参加
概 要	【4/23(木) 総会&研修会】 13:00 受付 13:30 総会 15:00 研修会 (1)報告:東日本大震災から考える防災と社会課題 木村紀夫さん(大熊未来塾) (2)再稼働、緊迫する柏崎刈羽原発一新潟から 中山均さん(新潟市議会議員) 【4/24(金) スタディツアー】 ・バス一台で木村さんのガイドで現地視察。 ・帰還困難区域内のため、行き帰り共にスクリーニング場にて受付・検査が必須。 ・現在、町民以外は出入り禁止だが、町民の方に同行という事で事前申し込みをしておくことで、帰還困難区域内へ入る事が可能。 ・順路：大熊町 CREVA おおくま→大熊スクリーニング場で受付・積算線量計を一人ずつもらう。防護装備セット（不織布の簡易防護服、帽子、マスク、靴カバー、手袋）をもらう（必要な人のみ）→熊町小学校内現地視察→熊川区公民館跡現地視察→栽培漁業センター跡現地視察→木村さん宅津波被害跡地&遺骨捜索現場視察→大熊スクリーニング場にて防護装備品・線量計を返す。一人ずつバスから降り、靴裏の線量測定→CREVA おおくまにて終了。 ※別紙、資料添付。



所 感 等

<星野幸彦>

福島原発震災情報連絡センターの研修会、スタディーツアーは2011年東日本大震災直後から年1回開催されており、今年で16回目である。この会には第9回2019年から毎年参加しており、今年で8年を迎えた。一日目には研修会、二日目にはスタディーツアーとして被災現地を回るフィールドワークを行う。

今年の研修会では、『東日本大震災から考える防災と社会課題』として木村紀夫さんから講演をいただいた。木村さんは東日本大震災時、大熊町の熊川地区（海の近く、立入禁止区域）に暮らしていたが、同居家族のうち父親、妻、次女が津波の犠牲となった（母親、長女は助かった）が、福島第一原発事故により捜索が阻まれ次女（汐風）さんの遺骨発見までに実に5年9か月を要したが、未だ遺骨の8割は見つかっておらず、現在も捜索を継続中である。この事から防災やそれに伴う課題についてお話された。講演では実体験をもとにこうしていればや、どうして家族を失うことになったのか、なぜ救出できなかったのかなど、リアルな話を聞くなかで身につまされる思いと共に、考えさせられる事ばかりであった。

二日目もやはり木村さんのガイドで今も帰還困難区域にある当時の住居跡や子供たちの通っていた学校、遺骨発見捜索場所などを視察し前日の講演の本当のリアルを肌で感じた。福島第一原発事故は終わっていないのだと、改めて痛感した。ふくしまを忘れない！忘れてはならない！

<池野里美>

・初めて、福島原発震災情報連絡センターの総会と研修会、被災地へのスタディーツアーに参加した。東日本大震災から15年が経ち、この会も16回目ということで、震災後に全国の自治体議員が集まり福島の人々の声を聴き、現状を学び、国へ要望活動をしたり、支援などについて考えたり、毎年勉強を重ねてこられた会の意義は大きい。

・木村さんからは、東日本大震災から考える防災と社会課題という題で話を伺った。震災で、お父様と奥様、次女の汐風さんを津波で亡くされている。津波で亡くなった児童は、汐風さん一人。他の児童は先生とともに避難し無事だったが、次女の汐風さんを迎えに来たおじい様の車に乗り海に近い自宅へ戻る途中で津波により命を落とされている。引き渡し訓練は、小中学校では保護者への引き渡し訓練を行っているが、「引き渡さないで欲しかった」という木村さんの言葉にハッとさせられた。引き渡した先生を責めることはできないが、児童がどこへ向かうのか把握し必要に応じて「引き渡さない」という選択をできるのかという事は難しい。しかし、実際に起きてしまった事から学ぶことが多くあると痛感した。

・2日目のフィールドワークでは、福島第一原発から4キロ圏内の帰還困難区域内の現地を視察。まずは、震災当時のまま残されている熊町小学校を見学。小学校の敷地内に設置されているモニタリングポストは、 $1.8\mu\text{Sv}$ （マイクロシーベルト）あり、未だに空間線量が高いことに驚いた。ガイドの木村さんが持参した線量計でモニタリングポストの脇にある草むらを図ると、 $6.6\mu\text{Sv}$ という数値。モニタリングポストはコンクリートブロックの上に設置されているので数値が低く出るが、地表付近は大体、通常 $5\sim 6\mu\text{Sv}$ はあるとの説明を伺い、帰還困難区域内の厳しい現実を知った。学校内に残さ

れたままのランドセルや上履き、散乱した本など、震災当時のままの状態からは慌てて避難した当時の状況が容易に想像でき、3月11日で時が止まっている状況に胸をえぐられる思いだった。木村さんが以前に学校を案内した大学生に「原発構内の見学よりも、熊町小学校を見た方が原発事故を自分ごとに感じる」と言われたという話と、「汐風を忘れないためにも、震災と原発事故の経験を語り継ぐためにも、ここを原子力災害の遺構として残してもらいたい」と語られていたのが心に残っている。一人一台渡された積算線量計は、午前中の間に0.0→2.1となった。

今回、被災された木村さんの話を現地で聴き、稼働中の原子力発電所で事故が起こるとどうなるのかという事を改めて自分事として考える機会となった。原子力発電所の立地する柏崎市民として、木村さんの話を多くの人から聴いて頂き、原子力災害を自分事として考えてもらう機会が必要ではないかと強く思う研修会であった。

【記録】



＜木村さんが遺骨収集の際に見つけた
遺品を古滝屋の一室にて展示＞



＜大熊未来塾代表：木村紀夫さん＞
＜1日目の講演会より＞



＜防護装備セット＞
スクリーニングポイントで
希望者へ配布→回収



＜熊町小学校内に設置の
モニタリングポスト：1.8＞
※同じ場所で線量が異なる。地表近くは線量が高い！



＜熊町小学校敷地内を個人
の線量計で測定：6.6＞



＜草木に覆われた
熊町小学校＞



＜震災発生当時のまま靴が
散乱している児童玄関＞



＜震災発生時 2：46 で止
まったままの時計＞



＜熊町小学校入り口付近に設置されて
いるモニタリングポスト＞



＜熊町小学校前にある児童館＞
※防護服は無料で配布。着用は任意。

＜木村さんの自宅跡＞→
津波で家は全て流されてしまった。

＜熊川区民館跡＞↓
ここへ避難していた住民は、津波に流され
たが、脇にあった神社の木につかまって
一命をとりとめた。

